

ISSN 0919-0120

2012. 9 No.81

豊田資料館
郷土資料館
だより

No. 81

Toyota City Museum
Of
Local History

目次

- ・企画展 「平勝寺二天立像修復記念特別公開」 …… 2
- ・松平氏遺跡（高月院）の保存修理 …… 3
- ・民具調査だより - 8 商家の道具 2 - 茶壺と茶箱 …… 4
- ・平成 24 年度特別展準備レポート②
岸田吟香とヘボンとの出会い
～日本で初めての本格的な和英辞書『和英語林集成』の誕生～ … 5
- ・ミツドンブリを追いかける 近世・近代の食文化(2) …… 6
- ・平成 24 年度発見館企画展
「地図に名を遺した人たち ～とよたの近代を拓く～」 … 7
- ・文化財シリーズ 81 市指定文化財 旧紙屋鈴木家住宅 … 8
- ・資料館 NEWS …… 8

企画展 「平勝寺二天立像修復記念特別公開」

平成24年9月15日(土)～平成24年10月21日(日)



修復後「多聞天」



修復前の「二天立像」と「木造観音菩薩坐像」



修復後「持国天」

平成23年度、豊田市綾渡町にある平勝寺が所蔵する「木造二天立像」の修復が行われました。この修復された像二体を、豊田市郷土資料館にて特別に公開します。

●木造二天立像について

「木造二天立像」は、昭和32年9月6日愛知県の有形文化財(彫刻)に指定されています。現存しているのは二体ですが、もとは四天王であった可能性もあります。本尊を護る役目をもつ天部の像は甲冑姿で、邪鬼を踏みつけ、険しい顔つきをしています。この二体は、像の姿から多聞天と持国天であろうと考えられています。二天ともに胡粉地が残り、唐草模様のような彩色が随所に見られます。足下の邪鬼は、荒彫りの彫刻で珍しい形をしています。

像の大きさは、高さ約145cm、桧材、頭体は一本造で、腰、膝など部分的に寄木にて剥ぎあわされています。制作年代は、はっきりわかっていませんが、本尊の仏像「観音菩薩坐像」(国指定文化財)には平治元年(1159)の墨書銘があるため、この年代に近いのではないかと考えられています。

●修復の内容

像の表面にみられる彩色の色止めを行い、木質が炭化・風化した部分と邪鬼に、薬剤を浸透させ強度が増すようにしました。また腕など剥ぎあわせの緩みが見られた部分は、剥ぎ目をクリーニングした後、ニカワ・竹釘で接合しました。足のホゾ、邪鬼のホゾ穴ともに

朽ちて損失し、傾いていたため、後補の部材を取り除き、桧材、樹脂で補強しました。修復前は、傾いて自立もままならなかった状態でしたが、しっかりと自立し安定感を得ることができました。また、これまで台座は邪鬼だけでしたが邪鬼の保護のため^{かまちだい}框台を新しく作り、そこから後背を支える棒を立ち上げ、安定した状態で後背を設置しました。

●平勝寺の歴史と文化財

平勝寺のある綾渡は、香嵐溪がある足助の町並みからさらに車で15分ほど山間に入った標高500mの山里です。その歴史は古く、縁起によると聖徳太子により開かれた霊場といわれています。もとは檀独山大悲密院といいましたが後醍醐天皇の皇子が祈願にこられたことにより鳳凰山平勝寺と改称されました。綾渡には「よみでら」「とうばがね」「だいもん」などの地名があり寺院の堂塔伽藍があったことを偲ばせます。

地域の人々が今も伝える「夜念仏と盆踊り」(国指定無形民俗文化財)や、元徳2年(1330)の年号が書かれた「平勝寺扁額」(県指定文化財)を伝えるなど、歴史の奥深さを感じさせます。

今回の修復により、地域の人々に古くから大切に守られてきた「木造二天立像」は、本尊の観音菩薩坐像とともに文化財としてさらに後世の人々へ綾渡の歴史・文化を伝えることでしょう。特別公開のこの機会に是非ご覧ください。

●本像の修復は、公益財団法人住友財団の「文化財維持・修復助成事業」および愛知県教育委員会・豊田市教育委員会の補助事業により実施されました。

松平氏遺跡（高月院）の保存修理

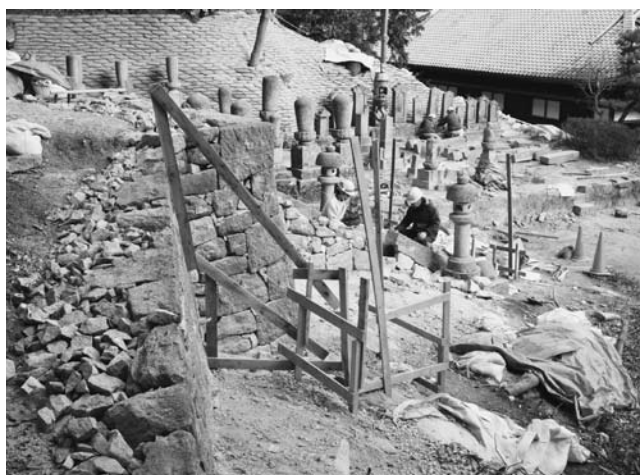
国指定史跡「松平氏遺跡」内の高月院墓所及び松平氏館跡は、地盤の緩みや樹木の生育による石垣の歪みなど、経年劣化した箇所がみられました。そのため、これらを緊急修復し、保存維持を図る必要性が生じ、平成20～21年度に協議を進め、平成22年度から3年間にわたって事業を実施することになりました。

平成22年度は修理箇所を含めて高月院と松平氏館跡の史跡全体について現況を確認し、細部を確認しながら測量と地盤調査を行いました。この調査結果に基づいて図面の作成と修理復旧計画を進めました。



墓所入口の石垣：樹木の生育による歪みと工事準備の状況

平成23年度は高月院の松平氏の墓所の修理を行いました。修理内容は①墓所入口の石垣の解体修理、②石段の解体修理、③墓所（廟）の石塀の歪み補修、④斜面の養生などに分けられます。①は石垣が樹木の根の成長により膨らんだため、根を取り除くとともに石に番号をつけて一度解体して石垣を復元しました。②は地



墓所入口の石垣：樹木の生育による歪みと工事準備の状況



解体中の墓所入口の石垣

盤の緩みから奥の石段と石垣が傾斜して歪んでいたため、解体して石段下の補強をした後に石垣と石段を再度組み立てました。③は②の修理の後に墓所（廟）の石塀の歪みを補正して組みなおしました。

④は墓所を取

り囲む斜面の崩落を防ぐために危険な樹木を除去するとともに、斜面の土が流れないように植生土嚢を積み上げました。この他、傾いて危険性のある墓石の修復を行いました。これらの工事はいずれも城跡の石垣の修理に実績のある専門の方たちが、コンクリートなどを使わない旧来の工法により丁寧に進め、石垣・石段などを修復することができました。

平成24年度は現況調査・測量等に基づいて、八幡社の社に上がる石段の傾斜箇所、石垣の一部陥没箇所、社の縁石の解体修理などを行う予定です。



修理後の高月院墓所

商家の道具2—茶壺と茶箱

茶壺に追われて

♪ズイズイズッコロバシ胡麻味噌ズイ 茶壺に追われてトッピンシャン 抜けたーらドンドコショ〜 俵のネズミが米食ってチュウ…♪のわらべ歌をご存知でしょうか？寛永10年(1633)徳川三代将軍、家光のときに始まったと言われる「お茶壺道中」の物々しさを諷刺した歌で、それは迷惑であり恐れでもあったようで、戸をしめ、ただただ静かにして行列をやり過ごし、♪抜けたーら♪安心して一息つくといったような歌詞だと言われています。籠で運ばれた茶壺の大きさは定かではありませんが、足助町の商家、萬屋田口金八家には大小の茶壺が茶箱と共に残されています。

茶壺

収穫された茶葉は、蒸し・揉み・火入れの過程を経て、容器に詰めて問屋に出荷されました。古くは運搬容器には大型の茶壺が用いられました。萬屋さんのそれにも発送伝票が残されたものが多くあります。壺は備前や信楽で焼かれたようで、強度を高めるために和紙を貼り、柿渋が塗ってあります。写真Aには、『御銘茶』の文字と萬屋さんの商標である『杵に杵搔き』が貼られています。写真Bはこの裏側ですが『瑞魁園』と『風六貫目』と記されています。萬屋さんの壺には、『瑞魁園』とは別に『碧露園』と書かれた物もあります。『風六貫目』は“風袋”で容器の重さを表しており、商品の売買にはこの風袋を含めた皆掛と、皆掛から風袋を引いた正味があります。六貫目は一貫目が3.75kgですから、23kgもありますので調査で運び出すのも一苦労でした。

茶箱

茶箱は茶櫃とも呼ばれ、大正時代に普及した木箱です。茶箱には二種類あり、写真Cはダビツと称される箱で、蓋の裏に棧が打ちつけられています。全体に和紙が貼られており、内側にトタン(亜鉛銅板)が張られたものとそうでないものがあります。写真Dはエンロと呼ばれる木箱で、蓋受けのハチマキが付けられており、蓋の内側と本体の内側にもトタンが張ってあります。エンロはダビツに比べ密閉性にすぐれており、茶葉の品質を損なわずに保管することができるため現在でも茶容器として用いられています。箱の大きさは十貫目(37.5kg)、十二貫目(45kg)、十六貫目(60kg)とがありましたが、輸送用には十貫目、十二貫目とが主に使われ、一番大きな十六貫目の箱は輸送用ではなく、主に工場で使用されたようです。

他にも

製茶に関する道具では他にも、選別に使う茶箕(飛出箕)、茶篩、箄(マンジュウとも言う)なども数多く残されており、また選別に用いたであろうと思われる小型の唐箕もあります。加えて、茶を蒸した丸形や角形の蒸籠一式も残されています。

萬屋さんのお蔵の中には紹介しました茶壺や茶箱をはじめ、製茶から販売までのさまざまな道具が良い状態で保存されていますので、何らかの形で多くの人に見て頂く機会を設けるべきではと考えます。

(東海民具学会 岡本大三郎)



●写真A(左)・写真B(右) 一茶壺 Wφ520 H790

●写真C
一茶箱
W676
H510
D445



●写真D
一茶箱
(小型の物)
W270
H213
D374

岸田吟香とヘボンとの出会い ～日本で初めての本格的な和英辞書『和英語林集成』の誕生～

江戸への遊学と「吟香」の由来

嘉永5年(1852)、19歳の岸田吟香は江戸に出て、津山藩の藩儒昌谷精溪や幕府の教育機関である昌平坂学問所で学びました。やがて林図書頭の代講を勤めるほどになり、めきめきと頭角を表します。安政2年(1855)には、吟香は持病の脚氣が悪化し、故郷の美作に帰りますが、同4年には再び江戸に上ります。

挙母に残る資料は、安政3年(1856)に吟香が挙母藩士として仕えたと伝えています。それと同時に尊皇攘夷派の志士でもあった吟香は、安政5年(1858)9月に始まった尊皇攘夷派の弾圧「安政の大獄」から逃れるために、上州の伊香保(群馬県)に逃亡します。安政7年(1860)、桜田門外の変の後に江戸に戻り、再び挙母藩に仕えて、万延2年(1861)には儒官に昇任します。しかし、吟香は侍でいることが好きでなかったようで、ほどなく挙母藩を脱藩しています。

その後の吟香は今までの学問、侍生活から一転して、吉原で女郎屋の主人になったり、左官の手伝いをしたりと、町人としての新たな暮らしを始めました。

実は吟香という名前もこの時期に生まれました。本当の名前は辰太郎だったのですが、脱藩をしたため身を隠す必要があったからなのでしょう。奉公先で名前を聞かれ、口から出まかせに銀次という名を語ったそうです。それで周りの人から「銀公、ぎんこう」と呼ばれたため、それをそのまま「吟香」という名前にしたと自らの日記の中で語っています。あだ名をそのまま自分の名前にしてしまうなんて、面白いですね。

ヘボンとの出会い

町人として暮らしていた時に、吟香は一か月近くも眼を患います。これでは大好きな読書もできなくなると恐れた吟香は、横浜にアメリカのヘボン先生という名医がいると勧められ、藁をもつかむ思いで診察を受けに行きます。この人こそ、ヘボン式ローマ字で有名なヘボン博士であり、この出会いが吟香の人生にとて

つもなく大きな影響を与えることになります。ヘボンの施した目薬によって、吟香の眼はみるみるうちに回復しました。また人々を無償で診察するヘボンの徳の高さに吟香は深く感銘を受けるとともに、ヘボンが和英辞書を編さんしていることを知ります。漢学・和学、

百姓・武士・町人といったあらゆる階層の言葉に通じていた吟香はヘボンに喜ばれ、その編さんを手伝うことになります。

日本初の和英辞書「和英語林集成」の誕生

吟香は、慶応元年(1865)に横浜のヘボンの家に移り住み、午前中は診療を手伝い、午後は辞書の編さんを手伝いました。

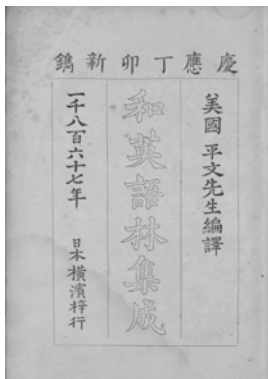
慶応2年(1866)には、辞書の原稿が仕上がりますが、当時の日本の木版では印刷が不可能であったため、上海の印刷所「美華書院」の活字で印刷するべくヘボン夫妻とともに横浜を出航し、上海に渡りました。

ヘボンに辞書の名前をつけて欲しいと頼まれた吟香は、もともとは「和英詞林集成」にしようと考えていましたが、扉紙の字を書く際に思い立って、「和英語林集成」に代えました。その時のことを日記の中で、四厘(詞林)を一厘値上げして五厘(語林)にした、と洒落を利かせて説明しています。

慶応3年(1867)、印刷を終えたヘボンと

吟香は日本に帰国します。和英語林集成の「和英の部」には見出し語が20,772語、付録の「英和の部」には10,030語が収録され、日本で最初に刊行された本格的な和英辞書でした。初版部数は1,200部で、1冊20両もしたといわれています。またこの辞書は、日本語を初めて横書きで印刷した辞書でもありました。当時の日本語は縦書きで、横書きのローマ字のことをカニが横に歩くような字として蟹字・蟹行字と呼んでいたことから、横書きが珍しかったことが分かります。

吟香は上海からの帰国後、目薬の販売、蒸気船・石油・氷事業など、上海での見聞やヘボンから着想を得た事業などに次々と挑戦し、また新聞記者として活躍することになります。ヘボンとの出会いによって、吟香の航路は大きく開けていったのです。(不破 恵理)



<吟香によって書かれた題字>



<本文>

ミツドンブリを追いかける

近世・近代の食文化(2)

●ミツドンブリの記録ー習慣の始まりー

先に紹介した百々町の事例のほかにも、既刊の郷土資料にミツドンブリの記録が留められています。

明治38年(1905)豊田市西町 七夜祝いの献立

『近代の暮らしと食Ⅰ』(豊田市教育委員会1993)

【大人】

○吸物(むきみ・せり)・**ミツ井**・皿(ほら2尾)・寿司(四つずつ)・吸い物(鯛の白味噌汁)

○本膳(飯・汁・つぼ・白和え・酢和え)

○盛込(魚・ごんぼ・れんこん・蒲鉾・菓子昆布・守口・格麩・まつば・蜜柑)

【小人】

○本膳(飯・汁・酢和え・つぼ)

○大引(ごんぼ・さかな・みかん・守口・いも・れんこん・格麩)

○引菓子(饅頭二つ)

大人の献立にのみミツドンブリが出現し、かつ白飯が含まれる本膳より前であることから、祝宴において酒を頂きながら、参加者がミツドンブリの料理を取り分けて楽しむ様子がうかがわれます。百々町の事例を踏まえると、近代では、家屋の新築や人生儀礼など、祝宴が行われる際の定番であったことが分かります。

さらに時代をさかのぼってみましょう。19世紀以降の祝宴献立が多数確認できる、豊田市足助町小出家文書(特別展図録『祝いー宴・贈り物・芸能ー』豊田市郷土資料館2011)でミツドンブリに注目してみると、興味深い事実が分かります。安政4年(1857)「お駒安産男子出生諸色控」中の「七夜献立」、万延元年(1860)「寿之助元服諸色付留帳」ではいずれもミツドンブリが確認でき、かつ、客の重要度で献立の内容を変えている後者では、松・竹・梅の客層に従い、内容に変化が付けられています。同じく、安政4年に東市野々村(小原地区)の伊藤家で執り行われた祝言の献立にもミツドンブリが確認でき、幕末期には盛んに行われていたことがわかります(『小原村誌』小原村教育委員会1964)。幕末期の記録では、ドンブリに盛られる料理は様々で、厳格な決まり事は無いようです。

小出家文書でさかのぼることのできる最古級の献立には、寛政4年(1792)11月5日「お慶結納之節献立」、享和元年(1801)11月2日の祝言献立がありますが、いずれでもミツドンブリは確認できません。以上からミ

ツドンブリの習慣は、19世紀前半、突如出現し、急速に広まったことが分かります。

●「ミツドンブリ」は消滅したのか？

前回、ミツドンブリの習慣は昭和30年代末頃を境に衰退したと記しました。しかし豊田市山之手で料亭を営む田中麻衣子さんのブログから多くのことを教えられ(<http://bijintei.booo-log.com/>)、直接お話する機会を頂いたので、ここで紹介します。

「母が高橋地区で仕出し店をやっており、葬儀屋さんの注文を受け、弔事のあった家庭でお客様に振舞う食事に割子弁当を配達していました。元々はご家庭で、お客様銘々に据える料理、取り分けて食べる料理を作っていたわけです。割子弁当を取り寄せるようになって、ミツドンブリは各家庭で用意したようですが、時を経て、それも注文として頂くようになりました。母はミツドンブリがどのようなものか知らなかったので、教えて頂いて対応しました。足助地区からの注文が多く、ドンブリも配達し、後日引き取る方式でした」

以上のお話から、1990年代初頭頃までミツドンブリの習慣が行われていることがわかりました。また仕出しのミツドンブリが「ドンブリに入れ配達する方式」であったことは、習慣が途絶える前に、ドンブリが家庭から姿を消したことを示唆しています。田中さんの「1年ほど前、久しぶりにミツドンブリを思わせるご注文を受け、懐かしくてブログに書きました」との言葉からは、その習慣がまだ生きていることを感じました。

本稿では、田中麻衣子さんから多くのご教示を頂きました。記して感謝いたします。(高橋健太郎)



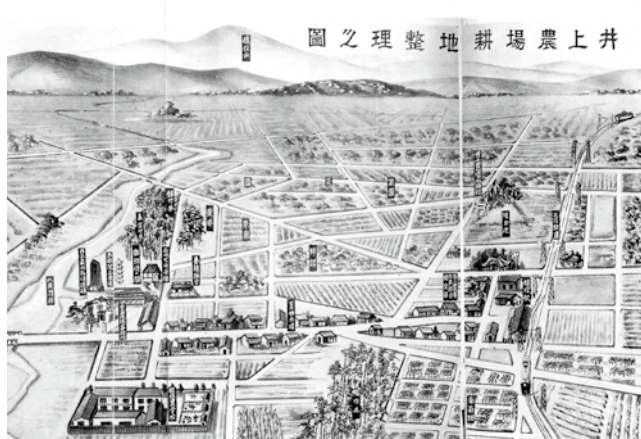
田中麻衣子さん

「地図に名を遺した人たち ～とよたの近代を拓く～」

地図に名を遺す。自分の名前が地名や構造物（橋やトンネルなど）として地図に遺るということは、どのようなことを意味するのでしょうか。それは、その地の発展のために尽力し、多くの人からその功績が認められたことを意味するのだと思います。

豊田市には、地図に名を遺した偉人たちがいます。そうした偉人とその功績を紹介する企画展「地図に名を遺した人たち～とよたの近代を拓く～」が7月24日～10月21日まで、豊田市近代の産業とくらし発見館で開催されています。ここでは、井上徳三郎と清水鎮平にスポットを当てて紹介しています。同じ慶応3年（1867）という江戸末期に生まれ、新しい時代・近代を切り拓いていく二人。事業・功績は違っても、私財を投げうって郷土・地域発展のために尽力した思いは同じなのではないでしょうか。

現在の豊田市「井上町」にその名を遺す井上徳三郎。両替商を営んでいた徳三郎は、株の売買で巨万の富を得ましたが、この資金を社会のために使いたいと考えて、明治39年（1906）に廃業します。そして「農業は、これこそ国の基、これを育てるべし」の信念のもと、明治44年（1911）に猿投村大字四郷字東山に約130haの土地を購入して、井上農場の開墾に着手しました。農場への入植者招致や耕地整理を行い、創業25周年の昭和11年（1936）には開墾面積約100ha、60戸、約300人の集落になりました。この年、その功績が猿投村から認められ、猿投村大字四郷字東山は字「井上」に改称されました。その後、猿投町が豊田市と合併した昭和42年（1967）に、猿投町大字四郷字「井上」は豊田市井上町となりました。



「井上農場耕地整理之図」

徳三郎は他にも大きな事業を二つ行いました。一つ目は三河鉄道（現在の名鉄）猿投駅の召致です。私たちが名鉄三河線の路線図を見た時、平戸橋駅から西に急カーブして猿投駅へと向かいます。そこから先は平成16年に廃線となってしまいましたが、東に急カーブして矢作川沿いに線路が戻っていき、三河御船駅へと向かいます。この大きなカーブの原因を作った人物こそが徳三郎なのです。三河鉄道が猿投駅を作る際、徳三郎は井上農場でとれた作物の出荷等に鉄道輸送することを考えました。そして、猿投駅建設に際し、土地を提供して現在の位置に猿投駅が建つことになったのです。徳三郎が行ったもう一つの事業は猿投農学校（現在の猿投農林高等学校）の移設です。猿投農学校は元々、寺部にあった郡立農学校でした。郡制廃止に伴い、規模の小さかった農学校は存続の危機に立たされました。その際、徳三郎は井上農場の入植者のために、学校移設用の土地を提供しました。こうして郡立農学校は県立猿投農学校となって開校することとなったのです。

もう一人の人物、清水鎮平は現在の石野町石下瀬の小字に「鎮平」の名を遺しています。鎮平は、明治28年（1895）から石下瀬村（現在の石野町石下瀬）、石野村の村長などの役職を歴任しました。鎮平は、水田の少なかった石下瀬村東枝下に水を引くために、勘八山を流れる成合川を堰き止めて成合川池を造りました。そこから成合川用水を開削し、サイフォンの原理を利用して国道153号・力石川を挟んで西側にある東枝下の地へ水を引くことによって、約8haの水田を開墾しました。戦後、東枝下の地は石野村の「穀倉」と呼ばれるほど米がよく実ったと言われています。また、鎮平は力石川と矢作川の合流点に橋を架け、交通の便を良くしたことから、この橋は鎮平橋と名付けられました。他にも鎮平橋から東広瀬へ向かう道路の改修工事を行うなどの公共事業も行いました。

地図の中に出てくる名前は、言い伝えや地形・環境などに由来するものだけではありません。今回の企画展では、地名という誰にでも身近なところに郷土の偉人の足跡をみることができます。是非、ご覧ください。

（井上 直己）

文化財シリーズ

81

市指定文化財 旧紙屋鈴木家住宅

今回の文化財シリーズは、豊田市足助町本町にある旧紙屋鈴木家住宅をとりあげます。旧紙屋鈴木家は、紙屋という屋号の通り、元来は紙を扱う商家と考えられていますが、後に金融業や新田開発などを手広く扱う足助随一の商家となりました。文化3年(1806)には、足助に陣屋を置く本多家の年貢仕送り人に就任し、本多家家臣に位置づけられています。

旧紙屋鈴木家には、街道から足助川までの約1,200坪の広大な敷地のなかに、主屋以下16棟の建造物があります。特筆すべきは、座敷・土蔵などの日常生活に関係する建造物以外に、香嵐溪にある香積寺の修行僧が寄宿した旦過寮や、屋敷内の普請のための大工小屋が存在することで、近世後期に発展した資本家の実態を知りうる建築群として、極めて貴重です。

主屋は、安永大火の翌年である安永5年(1776)の建造で、足助の町並みのなかで最も古い建造物のひとつと考えられています。

現在は、建造物の腐朽が激しく一般公開を行っておりませんが、将来の一般公開に向け、順次建造物の本格的な修理の準備を進めています。



旧紙屋鈴木家住宅

資料館NEWS

夏休み子ども月間・夏休み子ども講座

7月14日(土)から9月2日(日)まで、「夏休み子ども月間」を開催しました。期間中には子どもたちが「火起こし体験」「お宝さがしなぞときラリー」に挑戦したり、「すえちゃん・どうたくんのうちわ」作成などのワークショップを行いました。多くの子どもたちが郷土資料館で、楽しい時間を過ごしていました。また、「古代の布作り」「まがたま作り」「史跡めぐり」の各講座では、夏休みを利用して参加した親子が、様々な歴史に触れる時間を過ごすことができました。



現在開催中の企画展

○「古い道具と昔の暮らし〜暮らしをまもる人々〜」

期間：10月21日(日)まで ※月曜休館(祝日は開館)

時間：9時～17時(入場料無料)

場所：豊田市郷土資料館(陣中町1-21)

○「地図に名を遺した人たち〜とよたの近代を拓く〜」

期間：10月21日(日)まで ※月曜休館(祝日は開館)

時間：9時～17時(入場料無料)

場所：豊田市近代の産業と暮らし発見館(喜多町4-45)

郷土資料館 今後の企画展・特別展の予定

○企画展「平勝寺二天立像修復記念特別公開」

期間：9月15日(土)～10月21日(日)

○特別展「明治の傑人 岸田吟香

～日本で初めてがいっぱい！目録・新聞・和英辞書～」

期間：2月2日(土)～3月10日(日)

利用案内

開館時間 9:00～17:00

休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)

入場料 無料(特別展開催中は有料)

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より 徒歩15分

とよたおいでんバス「陣中町一丁目」より西へ徒歩5分

駐車場 約20台

■豊田市郷土資料館だより No.81■

平成24年9月7日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎(0565) 32-6561 FAX (0565) 34-0095

E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp

URL: <http://www.toyota-rekihaku.com>

※豊田市郷土資料館だよりはHPでもご覧になれます。